

仏説孟蘭盆経物語



佐藤俊明

皆さん、お盆の由来をご存知ですか。

日本で孟蘭盆会（お盆の法会）が最初におこなわれたのは斉明天皇の三年（六五七）ということです。それ以来、千三百有余年、春秋の彼岸会とともに、祖先及び先亡の精霊をまつる大事な年中行事となりました。

お盆の起源はもともととと古く、いまを去る二千五百年、お釈迦さまがこの世におられたころの物語に由

来するもので、それをくわしく伝えてるのが『仏説孟蘭盆經』であります。

聞如是

一時仏在舍衛國祇樹給孤獨園 大目乾連始得六通

お釈迦さまには十人のすぐれたお弟子がいました。

その中でも、目連尊者というお方は神通第一といわれ、不思議な力をもっていました。

十大弟子

舍利弗 智慧第一

(智慧にすぐれ、いろんな問題を適切に処理する)

大目連 神通第一

(変幻自在の力をもっている)

摩訶迦葉 頭陀第一

(よく身心をととのえ、どんな苦行にもたえる)

須菩提 解空第一

(よく空の意義を体得している)

富樓那 說法第一

(説法がたくみで、ひろく人々を教化する)

大迦旋延 論議第一

(仏の教えを深く理解し、邪見を正す)

阿那律 天眼第一

(十方世界を手にとるように見通す)

優波離 持律第一

(よく戒律をまもる)

羅睺羅 密行第一

(行持綿密である)

阿難陀 多聞第一

(常時仏に随い、多聞で忘れない)

欲度父母報乳哺之恩 即以道眼觀視世間

見其亡母生餓鬼中 不見飲食皮骨連立

目連悲哀……

ある日のこと、目連尊者は、今は亡き父母のことを思い出し、安否を確かめたく、ご自慢の神通力でなが



めてみますと、悲しいかな、お母さんは餓鬼の世界におちて、何も食べることができずに苦しんでいたのです。

さて、その餓鬼の世界の苦しみというのは、「倒懸」といって、足をしばって倒たかにつるすことで、苦しみの大きいことにたとえたものです。

人はただ独りだけでは生きられないもので、大勢の人々のあたたかい愛情と協力にささえられて生きていくものです。それなのに、自らの欲望のために、人を殺して、獄舎につながられて苦しむのは、まさに「倒懸」でありましょうし、また、独りよがりて他人の迷惑を考えないのは、「心の倒懸」であり、それがために引きおこされる悲惨な出来事は私どもの周囲によく見られることです。

即鉢盛飯往餉其母 母得鉢飯

便以左手障飯右手搏飯食未入口化成火炭 遂不得食

目連尊者は、早速、餓鬼の世界に出かけ、お母さん

に食物を差上げたのです。ところが、恐ろしや、左手で食器を持ち、右手で食物をつまんで口に入れようとすると、食べものはたちまち焰となって、食べることができないのです。

石油危機を千載一遇のチャンスとして大もうけをしようとしたり、世論の総反撃にまでも便乗したり、虚飾の陰に満足することを知らず買いあさり、買いだめに狂奔する、さらには、収入が物価高に追いつけないなど、争いが争いを呼んで、この頃の世相はまさしく餓鬼道ではありませんか。

目連大叫悲号啼泣 馳還白仏 具陳如此

孝心あつい目連尊者は、その苦しみを見るにしのびず、お釈迦さまのもとに参り、教えを乞いました。

「餓鬼の世界に落ちて、苦しんでいる母を、なんとか助ける方法はないものでしょうか」

「お前の母は、生前の罪があまりにも深いので、いまそのむくいを受けているのだ。その母を救うには、お

前ひとりの力ではどうすることもできないだろう」

「なんとか、救う方法はないものでしょうか」



「さいわい、七月十五日が間近い。この僧自恣じしの日に、心から清らかな僧侶たちに供養するがよい。そしたら、大勢の僧侶たちの清浄な心の力が結集して、お前のお母さんはきつと救われるだろう」

「ありがとうございます」

(注) インドでは四月から七月にかけて雨期なので、お釈迦さまは、四月十五日から七月十五日までの九十日間、弟子たちの外出を禁じ、一処にとどまって静かな生活を送らせた。これを雨安居という。さて七月十五日の最終日は修行に参集した僧たちが、各自に反省懺悔する日なので、この日を僧自恣の日という。

爾時目連比丘及此大会大菩薩衆 皆大歡喜
而目連悲啼泣声釈然除滅 是時目連其母

即於是日得脱一劫餓鬼之苦

七月十五日、目連尊者が大供養会を設けたところ、お釈迦さまの教えの通り、お母さんは餓鬼の世界の苦しみから脱出することができたということです。

目連復白言……若未來世一切仏弟子 行孝順者

亦応奉此盂蘭盆……仏言

大善快問……年年七月十五日 常以孝順慈憶所生

父母……

「お釈迦さま。どうもありがとうございました」

「よかったネ」

「父母祖先を供養することがどんなに大切なことかよくわかりました」

私どもは日ごろ仕事に追われ父母祖先に対するつとめを忘れておりますが、誰もが日を同じうして、先祖のみ霊をまつり、冥福を祈ってその恩に感謝したいものです。



「それはいいところに気が付いた。仏教徒として一大運動を展開するがよい」

以上の物語がもとになってお盆の行事は生まれま
した。わが国では奈良朝のむかしから寺はもち論のこ
と、次第に一般の人々の家でも精霊棚を設けて先祖の
み霊をまつり、冥福を祈ってはその恩に感謝し、反省
のいとなみとするようになりました。



七月十三日（ところによっては月遅れの八月十三日
や旧暦の七月十三日）には墓地掃除をすませて精霊棚
を飾り、迎え火を焚いてこれを迎え、棚には新鮮な野
菜や果物にご馳走を供え三宝に供養したいものです。

「続二つの月」より